
夜の影

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の影

【Nコード】

N8764H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

オランダの街ユトレヒト。今この街で夜にだけ起こる奇怪な事件が問題になっていた。その問題の解決を依頼された本郷忠と役清明は。怪奇探偵シリーズです。今回はクトゥルフものです。

第一章

夜の影

近頃あの有名条約が結ばれたオランダの都市であるユトレヒトにおいて不可解な事件が続発していた。夜一人で歩いていると急に姿を消したうえ空から落ちてきてそれにより死んでしまうのだ。実に奇怪な事件である。

しかもそれが一つや二つだけではない。もう今月に入って十件にもなっている。今年から起こっているがもう犠牲者は二十人を超えている。実に奇怪な事件である。

「それで俺達がですか」

「はい」

見事な禿頭に青い目の鷲鼻の男が黒い髪を短く刈った精悍な顔立ちのアジア系の若い男の言葉に頷いていた。

「そうです。それで貴方達をわざわざです」

「成程」

茶色の髪を少し伸ばしセンター分けにした切れ長の目を持つこれまたアジア系の青年が彼の言葉に応える。青年はスーツで若い男はラフなシャツという格好である。

「日本からお話をかけて下さった理由はそれだったのですね」

「我々としても困っております」

実際に彼は困り果てた顔で話してきた。

「誰が一体何の為にと調査はしているのですか」

「まああれですね」

若い男が言ってきた。見ればハンバークを切ってそれを口の中に放り込みながらだ。

「少なくとも人間の仕業じゃないですね」

「やはり」

「しかも科学的調査は」

「しました」

男の言葉は小さくなってしまうていたが確かなものだった。

「ですがそれでも」

「わからなかったのですね」

「その通りです。察しをつけておられたのですね」

「わかりますよ。俺達が授けられる仕事はいつもそういうのですから」

彼は答えた。

「日本でも他の国でもね」

「そうです」

青年も言ってきた。

「この役清明と」

「この俺、本郷忠の」

青年と若い男はそれぞれ名乗った。青年は表情は消しているが男は微かに笑っていた。

「仕事は大抵が怪しいものですから」

「喜んで受けさせてもらいますよ」

「それでは」

「はい」

役が彼の言葉に応えた。

「御名前は確か」

「アイクです」

その禿頭で鷺鼻の彼が応えて名乗ってきた。

「ホセⅡアイクといいます。警視正です」

「警視正なのですか」

「そうです。まあここになるまでに髪の毛はこうなってしまうしました」

笑いながら自分のその見事な禿頭を指し示してきた。髪の毛はもう一本も残ってはいない。天然のスキンヘッドであった。

「何かと苦労しまして」

「お巡さんってのは何処でも苦勞しますね」

本郷は今度はハンバーグに添えてあったマッシュポテトを食べている。それを食べながらまたアイク警視正に話すのだった。

「色々」

「どの国にも犯罪はありますので」

警視正は述べた。彼の前にもハンバーグがあるが進む手は遅い。

「それは日本でも同じですよね」

「無論です」

役が警視正の問いに答えた。

「警視正が今仰ったように犯罪はどの国にもありますので」

「そうですね。やはり」

「そして不可解な犯罪も」

ここで彼は言った。

「存在します」

「それも何処にでもですか」

「その通りです。そして今このユトレヒトで起きている事件ですが」

「はい」

話は本題に入った。警視正の顔は困惑したものから真面目な、確かなものになった。そのうえで話をはじめたのだった。

「まず事情は最初に申し上げた通りです」

「人が消えて上から落とされる」

役はまたこのことを言葉に出した。

「しかも科学的な証明もできない」

「こうした事件があるとです」

警視正は真剣な顔であった。

「俗にこう言われます。悪魔の仕業だと」

「欧州ではそうなりますね」

「御国ではどうかわかりませんが」

二人の国である日本について考えての言葉である。

「欧州では。まだ悪魔という存在を信じている人間が多いのも確かですし」

「しかも実際にいますね」

「否定できないところが残念なことです」

答に他ならない今の警視正の言葉だった。

「私も会ったことがありますし」

「どうしてもそうなりますよね」

本郷は今度はビールを飲みながら警視正に対して述べた。当然ながらこの国のビールである。

第二章

「こうした仕事をしていると」

「はい。警察の中でも公にできない犯人を相手にするならば」

犯人が人間とは必ずしも限らない。これは彼等の中では常識の話であった。

「どうしてもそうなってしまいます」

「その通りです。しかし今度は」

「また悪魔が犯人でしょうか」

「さて」

役は今の警視正の問いにはすぐには答えはしなかった。まずは一呼吸置いてきたのであった。

「可能性は否定できませんが」

「悪魔ではないのですか？」

「悪魔という種族がこの世に何かしてくる場合は必ず一つのルールがあります」

彼は全てがわかったような口調で話をはじめてきた。

「そう。それは」

「契約ですね」

「その通りです。悪魔は契約によって動くものです」

人間との契約においてだ。キリスト教世界の悪魔というものはまず契約をしてそこから動く。言い換えればその契約がなければ何もできないのである。

「しかしそれがあるかというと」

「調べてみないとわかりませんね」

「はい。それがなければまた別の存在になります」

彼は話した。

「それが何であるかが大きな問題になります」

「悪魔でない場合ですか」

警視正は彼の言葉を聞いてまた考える顔になったのだった。

「だとすればそれは一体」

「私にもそこまではまだわかりませんが」

役の今の言葉は少しばかり歯切れが悪くなった。

「ですが。まずは調べます」

「御願ひできますか」

「では本郷君」

役は自分の横にいる本郷に顔を向けたうえで声をかけた。彼はまだ食べていた。パンをビールで流し込んでいる最中であった。

「行くか」

「今からですか」

「そうだ。このユトレヒトに出る」

こう彼に告げたのだった。

「そのうえで調べよう。それでいいな」

「はい。仕事ですからね」

役の言葉にぶっきらぼうに答えた役だった。

「行きますか」

「では食べ終えてからな」

とりあえずはこれは最後まで果たさなければということだった。

「街に出よう。それでいいな」

「わかりました。それじゃあ」

「それでは私も」

警視正も二人が調査に入ると聞いて急いで自分の食事を食べはじめた。

「ご同行させて頂きます」

「警視正がですか」

本郷は彼の地位を言ってから尋ねた。

「御一緒ですか」

「ははは、何しろ人手不足でして」

本郷の問いにその禿げ上がった頭の下顔を明るく笑わせてきた。

それまでは深刻な顔であったがそれが一気に明るなものになった。

「私もいつも現場にいますよ」

「そうなのですか」

「悪魔や妖怪が相手ですと」

彼は言う。

「どうしても相手をする人間も限られてしまいますからね」

「そうですね」

これはよくわかる本郷だった。何しろ彼にしろ役にしろその仕事をしているからだ。同じ仕事をしているからこそわかることであった。

「おかげで俺達はそのおかげで引っぱりだこですから」

「日本だけで仕事をされているわけではないと御聞きしています」

警視正はまた彼に言ってきた。

「このように日本以外の国でも」

「そうなのです。フランスに行ったこともありますし」

本郷はこのことについて警視正に話をはじめた。

「あとドイツなんかも」

「ドイツにもですか」

「はい、あの国にも行きました」

警視正に話す。

「欧州ですと他にはイギリスやスペインや。スウェーデンでも仕事をしています」

「本当に色々回られているのですね」

「EUの国は一通り回りましたよ」

また笑って警視正に話した。

第三章

「オランダははじめてですけれどね」

「オランダはですか」

「はい、はじめてです」

役が彼に述べる。

「はじめてです。旅行では一度来たことがあります」

「左様ですか」

「街を見るのも楽しみにしています」

今の彼の言葉はお世辞ではなかった。

「そうしたこともあり早速」

「まだ昼ですが宜しいですか？」

事件はいつも夜に起こっている。だからこう二人に問うたのである。

「それでも」

「昼の街をまず見たいのです」

役は微かに笑って今の警部の言葉に応えた。

「昼に見て。それから夜です」

「それからですか」

「確かに昼の街と夜の街は別のものです」

少し奇妙な言葉であった。

「昼に見せている顔と夜の顔はまた違うものです」

「それであえて昼にですか」

「違うものでありますが同じものでもあります」

また奇妙な言葉を述べた役だった。

「そう。鏡と同じです」

「鏡と」

「そうです。違う顔をしていてもそこにあるものは同じです」
「こう言うのだった。」

「ですからまずはもう一つの顔を見ます」

「昼の顔を」

「そうです。ですからまずは昼の街を見ます」

彼は言葉を続ける。

「それからです。夜に入るのは」

「そうですか。それではまずは昼の街を」

「はい」

こうして三人はまずは昼のユトレヒトに出た。まず街の北側に出るとその広場に黒い兎の像があった。本郷はその兎の像を見て言うのだった。

「あれっ、これって」

「ミッフィーだな」

「そうですね、ミッフィーですよ」

役に対しても言う。広場の中央にその黒い兎の像が可愛らしく立っていたのだ。ぬいぐるみでの姿そのままであった。

「これって」

「ナインチェがどうかしましたか？」

警視正はここで二人に対して言ってきた。

「この街のシンボルですが」

「ナインチェ！？」

「それがこの兎の名前ですが」

こう二人に述べるのだった。

「それが何か」

「ミッフィーじゃないんですか」

「ミッフィー！？」

警視正はその名前を聞いても首を捻るだけであった。

「何ですか、それは」

「あれ、この兎じゃないんですか？」

「いえ、これはナインチェです」

警視正はあくまでこう言うのだった。

「この街で生まれたものですから。わからない筈がありません」

「ミッフィーじゃなくて」

どうしてもわからないといった顔の本郷だった。その顔で警視正に対してまた言った。

「そのナインチェですか」

「そうですが」

「これはミッフィーでもありナインチェでもある」

ここで役が本郷に対して話してきた。

「ただそれだけだ」

「?という」と

「日本ではミッフィーと呼ばれている」

彼はまた話した。

「そしてこのオランダではだ。ナインチェと呼ばれているのだ」

「ああ、そういうことですか」

ここで話を理解した本郷だった。

「だからですか。つまり日本ではその呼び名なんですね」

「そしてオランダではだ」

「まあオランダの方が本来の名前なんですね」

これはわかる本郷だった。

第四章

「じゃあナインチェですか」

「しかしミッフィーという名前もいいですね」

警視正は少し考えを変えたといった感じで述べてきた。

「それもまた」

「あっ、御気に召されました？」

「はい。日本というどうしてもあの日本語独特の言葉が思い浮かびますが」

「独特の言葉!？」

本郷は日本語独特と聞いて目をしばたかせた。そう言われても具体的にはどういったものかわからなかったからだ。それで警視正に對して問うた。

「それはどういったものですか？」

「ですから。あのおやめぶりといえますか？」

随分と日本について詳しいということを窺わせる今のたおやめという言葉だった。

「平仮名の柔らかい表現の」

「それですか」

「はい、それを思い浮かべますので」

こう言うのだった。

「ですからそういった可愛い言葉はじめて聞きましたが」

「それでも御気に召されましたか」

「はい」

にこりと笑って本郷に述べた。

「中々いいものですね」

「いや、こちらも日本人として御気に召されて何よりです」

本郷もミッフィーという名前を気に入った警視正の話を聞いて笑顔になった。

「しかしです」

「何か？」

「また随分と日本語についてお詳しいですね」

彼は今度はこのことを問うたのだった。

「留学でもされたのですか？」

「実は若い頃研修で日本の警察に派遣されまして
穏やかな笑みを浮かべながら本郷に答えてきた。」

「それで。日本語について知りました」

「やはりそうでしたか」

「日本語は。正直参りました」

今度はこう言って苦笑いになった。

「あそこまで厄介な言語はありません」

「それ程までですか」

「欧州ではよく何ヶ国語も使える人間がいますね
こうした話もしてきました。」

「昔からそうした人間が」

「ええ、聞きますね」

本郷もそれを認めて頷く。

「実際に。そうした人は結構」

「それは言葉が近いからなのですよ」

「言葉がですか」

「オランダ語にしろです」

今彼等がいるこの国の言葉である。

「英語やドイツ語と近いのです」

「民族が近いからですね」

役も話に入って来た。彼等はそのミッフィー、ナインチェの前で
話を続けていた。

「だから言語もまた」

「そうです。だからこそです」

だからだと。警視正も述べた。

「私達はそれぞれの言語を学ぶことは容易なのです」

「そうなのですね」

「イタリア語とフランス語、スペイン語もです」

警視正は今度はこの三つの言語についても話した。

「この三つの言語の違いは極端に言えば方言のようなものです」

「方言ですか」

「そうです。方言なのです」

また述べる警視正だった。

「ですから学ぶのはかなり容易なのです。しかし」

「日本語はそうはいかないと」

「先程申し上げたスペインで」

そのスペインの中の話であった。

「バスク語というものがありますがこれも厄介な言語と言われていきます」

「バスク語とそれ以外」

役はまた述べた。

「それだけ異質な言語だと言われていますね、あのバスク語は」

「はい。そして日本語も」

その日本語もであった。彼等に見ればまさにそうなのである。

第五章

「あまりにも厄介でした。おかげで勉強するのに苦勞しました」

「それはまた」

「八条大学の風変わりな教授にも教わりましたが」

「八条大学の？」

「大和田教授だったでしょうか」

その名前も二人に話した。

「当時八十近かったそうですが。今も御存命と聞いています」

「あの人ですね」

役はその教授のことを知っているようだった。実際に目を明るくさせていた。そこに知っているということがはつきりわかるものがあつた。

「あの人には語学、勿論母国語である日本語にもかなり堪能な方ですから」

「大和田博士を御存知だったのですね」

「八条大学の風変わりな教授というところでわかりました」

静かに微笑んで警視正に答えた。

「だとすればあの人しかいませんから」

「だからですか」

「はい。それでです」

役はまた言ってきた。

「このユトレヒトですが」

「はい」

「やはり坂がないですね」

役は広場だけでなくユトレヒトという街全体を觀ての言葉を出した。

「この街は」

「オランダですから」

役の今の言葉に対してこう返す警視正だった。

「やはり。そうなります」

「そうですね。オランダですから」

そして役もこれだけで話がわかったようであった。

「どうしても」

「ああ、そうですね」

そして本郷もわかったようだった。今の二人の言葉に対して納得したような顔になってそのうえで頷く。これが何よりの証拠であった。

「オランダは灌漑でできた国ですからね」

「その通りです」

警視正は本郷の言葉に対しても述べた。オランダは海を灌漑してそのうえで土地を作ってきた国なのだ。従って平地が圧倒的に多いのである。

「神は海を作られたがオランダ人は陸を作った」

微笑んで二人にこの言葉を出す警視正だった。

「我が国に古くからある言葉です」

「そうですね。それは」

役がその言葉に対して頷いた。

「聞いたことがあります」

「我が国は灌漑でできた国です」

彼はまたこのことを話した。

「ですから。坂といったものもないのです」

「そうだったんですか」

本郷はこのことをはじめて知ったのだった。

「だからなんですか。そういえば」

「何か？」

「変わった自転車ですね」

彼は公園の中を進む自転車を見て言ったのだった。

「ブレーキがないですね」

「坂がありませんから」

警視正はだからだというのだ。

「だからです。ブレーキが必要ないのです」

「そんなにスピードが出ないからですか」

「そうです」

オランダの自転車は実はそういう事情があるのだ。あくまでオランダのみの話である。

「日本に来てまずそれに驚きました」

「自転車にですか」

「はい。ブレーキのある自転車を見て」

警視正は本郷に話を続ける。

「オランダとは全く違うなど。日本の坂を見るときとででした」

「日本は山ばかりですからね」

役は日本の地形について考えながらまた述べた。

「坂はかなり多いです」

「長崎でしたね」

今度は九州にある街の一つについての話だった。

「あの街に観光で行ってさらに驚きました。あまりにも坂が多いので」

「ええ、あそこはね」

本郷も長崎の坂については苦笑いと共に述べた。

「坂が名物の一つですから」

「名物ですか、坂が」

「はい。そういう街です」

こう警視正に話す。

「それを考えるとオランダにはない街ですね」

「そうですね。確かに」

警視正は本郷の言葉に頷いた。

第六章

「そうした街はオランダにはないです」

「羨ましくもありますけれどね。歩くのが楽で」

「ははは、そうですか」

こんな話をしながら昼のユトレヒトを見て回るのだった。街は左右対称であり屋根はオレンジや白のものが多く美しい街並みだった。しかしそれは昼だけのことで夜は違っていた。夜の帳に覆われた街は灯りに照らされている場所以外は完全に漆黒だ。何も見えはしない。

「それでその夜ですね」

「はい」

警視正は本郷の言葉に頷きながらその夜の街の中にいた。当然役も一緒である。三人で街の中を進みそのうえで話をしているのだった。

「事件が起こる夜です」

警視正は昼とうって変わって真剣な顔であった。

「昨日は起こっていませんが」

「昨日はですか」

「はい、幸いにして」

こう二人に話す。夜の街には人が行き交っているが昼程多くはない。そしてその行き交う人達の動きもかなり慌しいものになっていた。

「ですが市民の誰もが」

「急いでいますね」

本郷と役は彼等の動きを見ながら言う。

「やはり。事件を気にしてですか」

「一連の事件を」

「その通りです」

答える警視正の言葉も暗いものだった。夜の灯りの中に映し出される街は暗いものに見えていた。何もかもがわかっていないその暗い事件を前にしてだ。

「その事件のおかげで」

「そうですか。やはり」

役は警視正の言葉を聞いて頷いた。

「そのせいですね」

「何もかもがわかっていないことがまず不安を高めています」

警視正はまた言った。

「そのせいで。皆余計に」

「だからこそ皆急いで帰ってるんですね」

本郷は自分の周りのその足早に過ぎ去る人達を見てまた話した。

「事件に逢わないように」

「そうです。いつも一人で歩いていると襲われます」

警視正は再びその事情を話した。

「一人で歩いているとです」

「一人ですか」

役はその一人という言葉聞いて考える顔になった。そうしてそのうえで警視正に対して言ってきた。

「それでしたら」

「何かお考えが？」

「はい、これを使います」

言いながら出してきたのは一枚の札だった。見ればそれは陰陽道の札である。

「これを使い」

「紙をですか？」

それが何か今一つ知らない警視正はその札を見て目をしばたかせた。

「それをどのようにして」

「これはただの紙ではありません」

彼は言うのだった。

「式紙といえます」

「式紙？」

「そうです」

こう警視正に述べた。

「我が国に伝わる陰陽道で使うものでして」

「陰陽道ですか」

「簡単に申し上げますと日本の魔術です」

警視正への質問は欧州のそれに合わせて簡潔なものにさせていた。

「白魔術にもなりますが黒魔術にもなります」

「どちらにでもですか」

「そうです。どちらにもなります」

彼の説明はこうであった。

「ですが私が使うのは白魔術になります」

「魔物を倒す魔術ですね」

「その通りです。これを使いました」

「そしてどのようにして」

「こうします」

こう言うとすぐに札を投げた。すると札が人の形になりそれと共に大きくなっていく。黒い髪をした美女になったのだった。服はス
ーツである。

第七章

「この式神を一人で歩かせます」

「それで様子を見るのですね」

「はい、そうです」

そういうことであつた。

「つまりは囿です。そして囿から様子を見ます」

「それでは我々はそれを見て」

「事件について調べます。これで如何でしょうか」

警視正に対して提案したのだった。

「これで」

「そうですね。それではです」

警視正は彼のこの提案に確かな顔で頷いた。

「それで御願います」

「はい、それでは」

こうして三人は遠くからその式神を見て探ることにした。式神は一人で夜の街を進む。やがてその式神の身体が自然に宙にあがったのだった。

「空にあがった!？」

「遂に」

三人はその式神の姿が上がったのを見てそれぞれ声をあげた。

「本郷君、上だ」

ここで役は本郷に対して言った。

「上を見てくれ」

「上!？」

「そうだ。式神の上だ」

その上を見ろというのだった。

「何が見える？」

「あれは」

役の言葉に応えてその式神の上を凝視する。するとそこにあるものが見えたのだった。

「やっぱり。思った通りですね」

「といいますと」

「いましたよ」

こう警視正に述べたのだった。

「上にね」

「その式神の上にですか」

「俺の目はね。特別なんですよ」

不敵な笑みと共に警視正に告げた言葉だった。

「見えるんですよ、どんな闇夜でもね」

「それで何が見えます」

「悪魔……いや」

本郷はその彼の目に見えるものを凝視しつつ語る。目がかなり細まっている。

「あれは違いますね」

「悪魔ではない」 10

「確かに似てはいます」

その姿を見続けた言葉だった。

「けれどあれは」

「では一体何なんですか？」

「悪魔みたいに真っ黒です」

まずは色からだった。

「夜そのものの色で。完全に溶け込んでいます」

「だから見えないのですね」

「はい、俺でもなきゃね」

その色についての言葉だった。彼は引き続いてその何かを見ていた。彼にだけ見えており役にすらとも見えないものであった。

「それです」

「それで？」

「頭には角が生えています」

「角がですか」

「はい、頭に二本生えています」

それも見えているのだった。彼には。

「それに尻尾がありますね。先に棘が生えてメイスみたいになっています」

「メイスですか」

「そうですね。それに翼が生えていて」
今度はそれであつた。

「それは蝙蝠のに似ていますね」

「ではやはり」

警視正はその姿を見てあらためてそれが何かをイメージした。彼にとってそこからイメージされるものは一つしかなかった。それは。「悪魔ではないのですか？」

彼はこう本郷に問うた。

「その姿は」

「似ていますけれどね」

「それでも違うというのですか」

「ついでに言えば人間みたいな手足があります」

本郷は言い加えた。

「そういったものも」

「ではやはり」

「はい。悪魔に思いますよね」

本郷は今度はかなり思わせぶりに警視正に問うてきた。

「普通は」

「それでも違うというのですか？」

警視正にとってはそれはまさに悪魔であつた。姿を聞く限りはそうとは思えない。しかし本郷はそれは違うという。これが彼にはどうしてもわからないことだったのだ。

第八章

「悪魔ではないのですか」

「何故ならですね」

彼は言った。

「悪魔にはちゃんと顔がありますよね」

「ええ、まあ」

これも警視正にとっては常識のことだった。悪魔には顔がある、そのことも頭の中にある。

「そうですね」

「それがないんですよ」

本郷は言った。

「顔がないんですよ」

「顔がない!?!」

「はい。頭はありますが顔はない」

本郷はまた警視正に説明した。

「顔がなくて。目も鼻も口も耳もないんですよ」

「何ですか、それは」

「日本で言うならのっぺらぼうです」

役も彼に告げた。

「本郷君、つまりそういうことだな」

「はい、その通りです」

本郷は彼の言葉に対しても頷いたのだった。

「今式神を上げているのはそれです。黒い得体の知れない奴です」

「何ですか、それは」

警視正には全く以って正体不明の相手だった。

「顔がないなんて。それは」

「ナイトゴーストだな」

ここで役が言った。

「ナイトゴーストだ、それは」

「ナイトゴースト!？」

本郷はその聞き慣れない名前を聞いて目を顰めさせた。役に顔を向けての言葉だ。

「何ですか、それは」

「本来は我々の世界とも冥界とも魔界とも違う世界にいる存在だ」

「違う世界にですか」

「勿論天界でもない」

つまり彼等が知るどの世界にもいないというのだ。

「精霊界にもな。全く異質の世界にいる存在だ」

「そんな世界があるんですか」

「異形の神々……いや神々と言っているものだろうか」

役はその整った顔を顰めさせていた。彼にとってはかなり珍しい表情になっていた。

「あれは」

「神々ですか？」

「そう言っていていいかどうかともわからない存在達だ」

言葉が複数称になっていた。

「彼等はな」

「何か知らないですけどとんでもない存在なんですね」

「悪魔は言うならば違う神だ」

役は言った。

「これはキリスト教世界の方には理解できないとは思いますが」

「ええ」

警視正は今の言葉は自分に向けたものであるとわかっていたので役に対して頷いた。

「正義は複数あるものでして」

「日本人独特の考え方ですね」

「そうです。ですから神にも正義があれば悪魔にも正義があります」
これこそまさに日本人の考えだった。日本人にとっては悪魔も正

義なのだ。ミルトンの失樂園も日本人が読めば悪魔もまた正義であるのだ。

「しかし彼等は違います」

「どう違うのですか？」

「ただ。本能だけの破壊衝動」

役は言った。

「彼等にあるのはそれだけです」

「それだけなのです」

「何かを破壊し殺したい」

役の言葉はこうであつた。

「それだけです。彼等にあるものは」

「何か極めて原始的な存在に聞こえますが」

警視正も眉を顰めさせて役の言葉に問い返した。

「それはどうにも」

「そうですね」

そして役もそれを否定しなかった。原始的な存在ということ。

「彼等はそうです。知能は高いのでしょうかがそこにある知性は人や他の世界の生物のような知性ではなく」

「そうした知性ではなく」

「本能がそのまま肥大化したような」

役は言葉を選びながら慎重に表現していく。

「そうした存在です。言わばアメーバがそのまま知性を持って巨大化した存在なのです」

「何となくわかりましたが」

警視正もアメーバと言われて何処となくイメージでわかった。

第九章

「しかしそうした存在がですか」

「何らかの事態でこの世界に出て来たのでしょうか」

役はこのように分析したのだった。

「おそらくは」

「そうなのですか。それがあのナイトゴーストですか」

「はい。彼等の世界の住人の一つです」

役はまた言った。

「あれは」

「それで役さん」

話が終わるとすぐに本郷は険しい顔で役に問うてきた。

「そのナイトゴーストですけれど」

「ああ」

「あいつ、それでどうすればいいんですかね」

「答えはもう出ている」

本郷に返した言葉はこれだけだった。

「もうな」

「ということはいつも通りですか」

「そうだ。倒す」

やはりこれしかなかった。確かに答えはもう出てしまっていた。

二人の仕事はこれである。それならばこう言うのも当然のことであった。

「ここだな」

「行きますか」

「もうこれで罫は終わりだ」

その言葉と共にそれまで持ち上げられていた式神が消えた。そうして一枚の札になってそれはすぐに闇夜の中にひらひらと舞った。

二人はそれを見ることなく同時に前に出た。

「仕掛けるがな」

「はい」

「注意することだ。敵は空を飛ぶ」

「ええ、わかってますよ」

本郷は不敵な声で役に応えた。応えながらも前に出続ける。駆け足だった。その駆け足でナイトゴーストの前に行く。そのうえで背中から刀を出していた。日本刀だ。

「空を飛ぶ相手とやるのも多かったですからね」

「慣れているというのだな」

「それは役さんだって同じでしょう？」

不敵な言葉はそのままだった。

「空を飛ぶ相手も海を泳ぐ相手も。毎度のことじゃないですか」

「それはその通りだ。ならば」

「ええ。別に気にすることはありませんよ」

言いながらナイトゴーストの下に出た。二人並んで立ちその魔物を見上げる。

魔物の姿は完全に闇夜の中に溶け込んでいる。その姿は見えない。しかし本郷の目にはその魔物が見えていた。彼の目は誤魔化せなかった。

「俺には見えますよ」

「先程と同じか」

「ええ。役さんはどうですか？」

「残念だがな」

まずはこう言うのだった。

「私の目は君のそれ程よくはない」

「そういうことですか」

「そうだ。しかしだ」

だからといって何もしないわけにはいかない。何もしなければ倒される。それが魔物との闘いであり二人はそのことをよくわかっていた。

「それでもやることはできる」

「どうするんですか？」

「これもいつも通りだ」

言いながら懷から茶色の札を出した。二枚ある。その二枚の札を天に投げるとそれは鷲の翼になった。その翼はすぐに彼の背につき羽ばたきだしたのだった。

「こうするだけだ」

「いいですね。俺も欲しいですね」

「当然君の分もある」

言いながらまた茶色の札を出してきた。それを投げるとまた翼になり彼の背に着いた。本郷はそれを身に着けるとすぐに羽ばたきだした。二人はその翼を使って羽ばたきナイトゴーストに向かうのだった。

本郷は右から向かう。しかし役の動きはたどたどしい。それがどうしてなのか本郷にはわかっていて。相手の姿が見えないからだ。

「見えないんですね」

「残念だな」

「じゃあどうします？」

「それでも方法がある」

また言いながら懷から札を出す。今度は青い札だった。札はまた投げられそれは無数の青い羽根になった。それを周りに漂わせるのだった。

「まずはそれで覆ってですね」

「これで護りはいい」

彼は護りを確かにしたのだと言った。

「これでな」

「言っている側から来ましたよ」

姿が見えている本郷が彼に告げた。

第十章

「来ます。上です」

「そうか」

役は彼の言葉に頷く。すると彼の周りを漂っていた青い羽根が上に一斉に向かう。そうして上から迫ろうとしていた魔物の身体を切り刻んだのだった。

「この羽根はただの羽根ではない」

役はその上を振り向きもせず述べた。

「近寄ってきた相手を切り刻む。こうしてな」

「お見事と言いたいですけれどね」

本郷は彼が戦うのを見て言う。その言葉は醒めたものだった。

「それでも。相手にとっては大したことじゃないみたいですよ」

「傷は浅いか」

彼の言葉からだけそのことを悟ったのではなかった。もう一つその根拠があった。

「そうだろうな。血は流れてはいない」

「ですね。滲み出てはいますよ」

本郷はそれもまた見えていたのだった。魔物の今の状態も。

「黒い血がね」

「その程度か」

「はい、その程度です」

また述べる本郷だった。

「残念ですけどね」

「なら。また来るか」

役は本郷の話からすぐにそのことを悟った。そうすると次は懷から赤い札を出してきた。それを放つと赤い火の玉になり複雑な動きをして宙を舞うのだった。

それは一つ放ったのではなかった。複数放った。火の玉達はそれ

それぞれの動きをして宙を舞う。その火によって相手の姿も映し出された。

「見えたぞ」

「ええ、そこですね」

本郷はその映し出された姿を見てそこに小刀を投げた。それは闇夜の中に白銀の光を見せて魔物に襲い掛かる。そのうえで肉を突き刺す音を立てさせたのだった。

「やったか」

「いえ、これも浅いですね」

本郷は苦い顔で役に述べた。

「最初から見えていましたけれどね。それでも」

「小刀は通用しないか」

「ダメージは与えています」

それは確かだと言っているのである。

「ですかそれでも」

「傷は浅いか」

「血は出ています。黒い血が流れ出ています」

やはり本郷にはこれも見えていた。

「しかしこいつは俺だけじゃ無理ですね」

「では私も」

「どうされます？」

本郷は宙を舞いながら役に問う。彼はそのまま飛び姿が見えているその魔物に対して向かう。そうして切りつけるが刀は闇の中に白銀の光を見せたただけであった。

「かわされたか」

「俺だけじゃ無理みたいですね」

本郷は攻撃がかわされたのを自分でも見て述べた。

「どうやら」

「そのようだな。この魔物はだ」

「悪いですけど俺一人じゃ防げはしますけれど倒せはしませんね」

「どうやら私だけでもな」

役も言った。

「二人同時に攻撃しないと倒せない相手のようだな」

「けれどどうです？」

本郷はまだ魔物にその手にしている日本刀で攻撃を浴びせる。しかしその攻撃はどれもかわされてしまっていた。白銀の煌きだけが闇の中に見えるだけである。

「役さん相手は見えませんかよね」

「残念だがな」

役は苦い顔で述べた。

「それはな。私の目では無理だ」

「俺しか見えませんか」

本郷だけである。他の者にはその闇夜に完全に溶け込んでいる姿は見えないのだ。

「ですが俺の攻撃だけじゃ。こいつを倒すのは」

「私の術もなければか」

「けれど見て下さいよ」

本郷の前に火の玉が来る。先程役が放ったその火の玉だ。しかしそれはあえなくかわされてしまう。見れば動きはお世辞にも速いとはいえないものだった。

「この火の玉は役さんが動かしてるんですよね」

「そうだ」

役は宙を舞いながら答える。式神の翼により。

「この火の玉は全て私が頭の中で念じ動かすものだ」

「見えていたらそれで相手にぶつけることも」

「できる。しかし見えていなければだ」

答えはそこに出ているのだった。

「残念だが。当てることすら」

「そういうことですか」

「そうだ。どうする、本郷君」

役は深刻な響きの声で本郷に尋ねてきた。

第十一章

「ここは。どうする？」

「引きますか」

本郷も無念な響きの声で役に返してきた。

「このままだとらちがあきませんよ」

「そうだな。今何をしてもな」

「はい、無駄です」

そのことがよくわかる二人だった。実際に闘っているからこそだった。刃を交えないとわからないことがある、それは闘いそのものについて最も言えることである。

「ですから」

「問題はどうかやって退くかだが」

「どうします？俺が一撃くれてそれからにしますか？」

「ダメージを与えてか」

「それなら動きも鈍って簡単にいけますよ」

刀を振るいながら言うのだった。その間もナイトゴーストは彼の攻撃を避け続けている。やはり刀が彼を切りつけることはなかった。

「どうしますか？そうしますか？」

「そうできればいいのだがな」

しかしここでの役の言葉は煮え切らないものだった。

「そうできればな」

「小刀なら」

「それでも動きを鈍めるだけのものになるかどうかだが」

「確かには言えませんがね」

「そうだな。それならばだ」

「やはり。止めておきますか」

役とのやり取りから考えを変えるのだった。言われてみればその通りだと自分で思うものがそこにはあった。

「ここは」

「そうしよう。しかしだ」

「ええ」

「闘いは止める必要がある」

どちらにしろこれは必要であつた。このまま延々と続けていても何にもならない。魔物に対して致命的な傷を与えることができなかった。だとすればやはり取るべき解決は一つしかなかった。

「何があつてもだ」

「では。どうしますか？」

「やはりこうするしかない」

言いながら懷からまたあの赤い札を出した。そしてそれを宙に投げ火の玉にした。

その無数の火の玉達を無造作に動かしはじめた。出鱈目と言つてもいい。しかしその出鱈目な動きを見て本郷は魔物から間合いを一気に離し後ろに退いた。役はそこに火の玉を集中させたがそれを見てか魔物は何処かへと飛び去つていった。それは本郷の目にははっきりと見えていた。

「行きましたよ」

「これで間合いが離れたところで一気に退くつもりだったがな」

「その前に向こうが先に退きましたね」

「それならそれでいい」

よしとするのだった。

「どちらにしろこれで目的は果たした」

「はい」

「闘いは終わった」

役はあらためてこのことを言った。

「これでな」

「とりあえずは、ですね」

二人はまだ宙を舞っていた。本郷は翼を使って役のところに来てそのうえで彼に対して述べた。

「一安心ってところですね」

「そうだな。あくまでとりあえずは、だが」
「ええ」

役の今の言葉に頷く。

「これで第一ラウンドは終わりです」

「しかし。厄介な相手だ」

役は彼にしては珍しく言葉を苦いものにさせていた。そうしてその声で言葉をさらに続けるのだった。

「私が見えないのだからな」

「それですね。俺一人だと倒すには至りませんし」

「それだ。二人がかりでなければ倒せない相手だ」

二人はこのことをよく把握していた。しかし把握しただけで相手を倒せるかというところではない。このこともまたわかつていたのだった。

「どうするべきかな」

「少し考えますか」

本郷は己の首を少し左に捻って述べた。

「次の闘いまで」

「また夜が来るまでか」

「はい。警視正が呼んでますよ」

気付けばそうだった。下から警視正の声がする。オランダ語で二人をしきりに呼んできている。闘いが完全に終わったと見て呼んできているのだ。

「このまま空にいても仕方ないですしね」

「戻るか」

「休むことも必要ですし。そうしましょう」

こう役に対して提案した。

「今は。そういうことで」

「そうだな。休むでしょう」

こう言葉を交えさせてそのうえで地に降りる二人だった。警視正

がその二人を出迎える。こうして最初の闘いは終わり相手はわかった。しかし何の解決もない闘いでもあった。

第十二章

次の日二人は闘いの後で警視正に話したことを今も話していた。話しながら運河を進む船に乗っていた。観光の為の遊覧船である。警視正はその中で二人に対して問うていた。

「では御二人が共に闘わないと勝てませんか」

「はい」

役が今の彼の言葉に頷く。

「その通りです。一人では足止め程度しかできません」

「そうですか。そこまで手強いのですか」

「ですが」

役はここで言葉を濁らせる。船は橋の下を通る。その時影が船を横切った。

その影は役の顔も一瞬だが覆った。しかしその影が通り過ぎたその時に彼はまた口を開いて言うのだった。

「逆を言えば二人でなら勝てます」

「そうですね。そうなりますね」

警視正もこのことはわかった。

「言い換えれば。ですが」

「わかっています」

警視正の言葉に対して確かな物腰で頷いての言葉だ。

「私にはあの魔物の目が見せません」

「そうですね。それは」

「それが問題です」

本郷には見えるが役に見えない、問題はそれであった。

「姿が見えれば。相手になるのですが」

「耳ではわかりませんが」

「特別な相手です」

今度は本郷が警視正に対して言ってきた。

「音は全然立てないんですよ、これが」

「全くですか」

「はい、全くです」

このことを話すのだった。

「全く。何一つとしてです」

「では香りは」

「それもです」

それもないというのだった。

「それで滅多なことでは見えませんし」

「事実上の透明人間というわけですね」

「俺が見えてなければどうにもならないところでした」

本郷は深刻な声で語るのだった。

「打つ手なしで。そもそも相手が何かもわかりませんでしたね」

「確かに」

警視正もそれはよくわかった。

「闘い以前になっていましたか」

「今程自分の目のよさに感謝したことはありませんよ」

普段は明るく言うところだがこの時ばかりは違っていた。どうにも暗い声だった。

「本当にね」

「そうですね。やはりそうなりますね」

「ええ。闇の中に隠れていて見えないのですから」

このことをあえて言う。

「どうするべきですかね、本当に」

「さて」

本郷も警視正もそれぞれ腕を組みだしその顔で考えはじめた。しかし答えが出る筈もない。こうして考え込んでいるところで運河のほとりにいる烏に気付いたのだった。

「烏ですね」

「忌々しいですね」

警視正は烏の姿を認めると眉を顰めさせてしまった。

「全く以って」

「烏はお嫌いですか」

「はい」

言葉に感情がそのまま出ていた。

「西洋では烏は死神の使いとされていまして」

「そういえば使い魔にも多いですね」

「魔女や魔術師の」

役の言葉にも付け加えるのだった。

「よくなります。猫や蝙蝠等と一緒にで」

「だから御嫌いですか」

「それもあります。が気分的なものもあります」

「気分的なものですか」

「はい。そうでなくとも烏は嫌いなのです」

「成程、それですか」

「はい、だからです」

相変わらず表情は嫌悪を露わにさせていた。

「烏だけは」

「しかし。目立ちますね」

本郷は警視正が嫌うその烏を見てまた言った。

「あの烏」

「そうですね」

警視正も嫌そう。なその表情はそのまま。彼の言葉に頷いた。

「それは確かに。白い石のところにいますので」

「黒は目立ちますからね」

彼はまた言った。

「白の中だと」

「そうだな」

役も彼の今の言葉には同意だった。

「本当にな。白には黒だ」

「はい」

「光と闇だ。だからかなり目立つ」

こうも述べる。そして述べている間に。あることに気付いたのだ
つた。

第十三章

「白と黒」

まずはこのことだった。

「そして光と闇だ。そうだな」

「どうかしたんですか？」

「これで見えるようになる」

役は悟った顔でいぶかしむ顔で尋ねてきた本郷に対して答えた。

「これでだ。見えるようになるぞ」

「見えるんですか」

「そうだ、見える」

彼は満足したような声でまた答えた。

「これでな。見えるようになるぞ」

「見えるって何がですか？」

本郷はいきなりそう言われてもわからなかった。首を捻りながら役に問い返すのだった。

「白と黒だの。何が一体」

「昼と夜だ」

今度はこう言う役だった。

「つまりはだ」

「ああ、そうですか」

昼と夜で本郷はやつとわかった。それでであった。

「魔物ですね。それですね」

「そうだ。あの魔物は闇の世界に完全に溶け込んでいるな」

「はい」

「しかしその姿は光に照らし出される」

このことはもう知っていた。昨夜の戦闘で火の玉に照らし出されていた。そのことはもうわかっていたのだ。はっきりと覚えてさえている。

「光にな」

「それでは」

「そうだ。魔物の姿を照らし出す」

役は言った。

「これで姿が見えるぞ」

「成程、それですか」

本郷は納得した顔で役の言葉に頷いていた。

「見えるようになるんですね。それで」

「それで仕掛けるぞ」

「ええ、じゃあそれで行きましょう」

二人の作戦はこれで決まった。本郷は満面の笑みで、役は思わせぶりな笑みで互いに頷き合う。しかしここで警視正が怪訝な声で彼等に言ってきた。

「ですが」

「ですが？」

「確かに光で魔物を照らし出すのはいいです」

彼もそのことはいいというのだった。

「ですが」

「ですが？」

「それで魔物を照らし出すと市民達にその姿が見られます」

彼が危惧しているのはそのことだった。

「この世にそうした存在がいるとなればパニックになるでしょう。」

「違いますか」

「それはその通りです」

役もそのことは頷いて認めた。

「魔物はいないことになっています」

「そうです」

警視正は役の言葉に応えた。

「それはまさにその通りです」

「私達も表向きの仕事は只の探偵です」

「そっちの仕事もあるにはありますけれどね」

本郷も言ってきた。彼等の表の顔は探偵である。実際は裏の仕事である今の仕事がメインであるがそれでも社会的にはそうなっているのである。

「収入はこちらの方が断然ですね」

「そうですね。それは公には伝えることができない存在を相手にしているからです」

警視正が言うのはまさにその通りだった。魔物は決してその存在が公になることはない。あくまでいらないことになっているのである。

「ですから。その姿が晒されるようなことは」

「避けて欲しいというのですね」

「その通りです」

頼み込むと共に是非に、という言葉であった。

「ですから。それは」

「はい、それはわかっています」

役はその危惧する警視正に対して明朗に返事をした。

「勿論です。だからこそ我々はこの仕事をしていられるのです」

「左様ですか」

警視正は今の彼の言葉を聞いて危惧するものから晴れやかなものにさせた。

「それではそのように。御願います」

「わかっております」

「それはいいですけれどね」

今度は本郷が話に入ってきた。

「それは」

「先程の私と同じ言葉になっていますが」

「そうですね。けれどそれでも言いますよ」

本郷はその豊かな表情を曇らせて言ってきた。

「光を使わないじゃあいつの姿は見えませんかよね」

「その通りだ」

役の今の返答は本郷にとってはわかっているのかと突っ込みを入れたものであった。しかし役の表情は何でもないようであった。

第十四章

「それはな」

「じゃあ何で光は使わないっていうんですか？」

仕事をする人間の立場からの問いであった。

「それで。どうするんですか」

「元々光をそのまま使うつもりはなかった」

だが役はここでこう言うのだった。

「それはな」

「光を使わない!？」

「いや、使う」

使わないと問われれば使うと言う役だった。

「光はな」

「言っている意味がよくわからないんですけれどね」

「光は白だ」

役はまた言ってきた。

「そして闇は黒だな」

「それで夜も昼も黒で白ですよね」

「そうだ。そういうことだ」

「何か御考えがあるんですね」

「なくて動くつもりはない」

平然と述べた。ここで船の中でロゼのワインを一杯飲むのだった。

本郷と警視正も既になりの量の酒を飲んでいる。

「そうでなくとも見えないのだからな」

「じゃあ見えるようにはするんですね」

「そうだ。今夜早速仕掛ける」

彼は言った。

「それでいいな」

「何かまだよくわからないですけどじゃあそれで」

とりあえず役の言葉に対して頷くのだった。

「やりますか」

「そう、今夜な」

こう答えてからまた言う役だった。

「それにしてもだ」

「今度は何なんですか？」

「本当に目立つな」

見れば役もまた鳥を見ていた。そのうえで言うのだった。

「ここで鳥は」

「はあ」

とりあえず二人は今の役の言葉に頷くだけだった。彼が何を考え
ているのかわかりかねていた。しかしその間にも時間は進み夜にな
った。その夜だ。

夜になると役はまず二人をある場所に案内した。そこは。

「ここですか」

「はい」

まずはそこに着いてから警視正に答えた。

そこはユトレヒト市街の中心であった。そこには街でもっとも目
立つものがあつた。それは塔であつた。警視正はその頂上まで狭
い階段を昇りながら役に問うた。

「このドムタワーにですか」

「そうです。まずはここです」

こう警視正に答える役だった。夜の塔の階段を彼が先頭に立って
登っていく。

「ここからです」

「ここは確かにこの街の名所です」

ユトレヒトの象徴でもある。ドム教会の一部なのだ。かつてはカ
トリックの教会だったが今はプロテスタントのものになっている。
塔が建てられたのは十四世紀後半でかなりの年代が経っている。そ
うした極めて古い塔なのである。その塔を今三人で昇っているのだ。

「しかし」

「しかし？」

「何故この塔に今？」

警視正はこう言って首を傾げるのだった。

「今どうして」

「どうしてですか」

「はい」

わからないといった顔でまた答える。

「私にはそれがどうも」

「おわかりにならないのなら何よりです」

しかし役は笑ってこう言うのだった。

「それでしたら」

「わかっていなくて何より？」

「そうです」

役はまた言うのだった。

「おわかりになられないのでしたら」

「随分と意地の悪い御言葉と見受けられますが」

「それは確かに」

役もそのことは認める。まだ階段を昇っている。

「ですがこの言葉です。敵を欺くには」

「まず味方からですか」

「そうです。頂上に辿り着いたら申し上げますので」

こう言いながらまだ階段を昇っていくのだった。

第十五章

「暫くお待ち下さい」

「それはわかりましたけれど」

本郷はその階段を昇りながら役に対して言ってきた。

「秘策だっていうのは」

「それでも何か言いたいそうだな」

「ええ、その通りですよ」

不平不満を露わにさせた言葉だった。

「何ですか、この階段」

「階段がどうかしたか？」

「滅茶苦茶長いじゃないですか、何なんですかこれ」

「君にはこれ位どうということはないと思うが」

本郷の体力を知っての言葉だった。接近戦を得意とする彼は当然ながらその身体を普段からかなり鍛えている。パートナーである役がそれを知らない筈がなかった。

「違うか？」

「それはそうですけれどね」

本郷自身もそれは認める。

「ですがね」

「ですが？」

「それでも長過ぎますよ」

そしてまた不平を言うのだった。

「この階段は」

「百十二メートルあるからな」

役は本郷から上の方に顔を戻して述べた。

「それも当然だな」

「百十二メートルですか」

「そして階段は四六三段だ」

「物凄いですね」

本郷はその階段の数を見て少し唾然となった。

「話を聞くだけで疲れますね」

「だからそれは君にとっては何でもないのではないのか？」

またこのことを言う役だった。

「違うか？」

「それは確かにそうですけれどね」

彼はまたそのことは認めた。確かにこの程度は彼にとっては何ともないものである。しかしそれでも不平は減らないのだった。

「何か。闘いの前に余計な体力使いますね」

「安心するといい」

しかし役は今の本郷の危惧にはこう返したのだった。

「闘いは昨夜のそれよりはずっと早く終わるずっとですか」

「君だけでなく私がいる」

自分がいると言うのだった。

「私も今度はな」

「闘えるんですね」

「魔物は必ず見える」

彼はまた言った。

「だからだ。安心するのは」

「そこまで言うんならもう安心させてもらいますけれどね」
本郷もいい加減その不平を抑えてきた。

「それじゃあ」

「そうしてくれ。もっともその不平も闘いがはじまるまでだ」

「はじまるまでですか」

「それよりもだ」

ここで話を変えてきた。

「闘いのことだが」

「ええ、そうですね」

「君はまずは接近戦を頼む」

本郷に対して次に告げたのはこのことだった。

「私は遠距離から攻める」

「いつもと同じようにですネ」

「ただし。昨日と同じだ」

そのうえでこうも言った。

「昨日とだ。それはいいな」

「ええ、それは当然ですネ」

本郷はわかっているといった感じの言葉で返した。

「さもないと勝負にはなりませんネ」

「そうだ。だからここはあれで行く」

役はまた言った。

「まずはそれからだ」

「ええ。まあやっと思ですけど」

本郷の言葉がほっとしたものになった。

「着きましたネ」

「ここからが最高なんですよ」

警視正も声は疲れていたがその調子はかなり上げて言ってきていた。

第十六章

「ここから見える景色がですね」

「そんなにいいんですか」

「美しいユトレヒトの街が全て見渡せます」

胸を張って誇らしげに宣言する。

「ここから」

「そうみたいです」

しかしそれを聞く本郷の今の言葉は冷ややかなものだった。

「どうやら」

「おや、あまり嬉しくはないのですか」

「見えないですからね」

今度は残念そうな声を出した。

「今は」

「まあそれはそうですね」

そして警視正も苦笑いを浮かべてそのことを認めるのだった。

「夜ですからね」

「夜景は見えますけれどね」

それは確かに見えた。白い無数の光がそこに見える。ユトレヒトの夜は見事なまでに輝いていたのだった。

「それはいいですけど」

「そう、夜景だ」

ここでまた役が言ってきた。

「夜景だな」

「夜景に何かあるんですか？」

「下を見てください」

彼はここで下のある場所を指差したのだった。

「あれをな」

「あれ!？」

「あれといいますと」

「そう、あれだ」

そこを指差しながら言葉を続ける。

「あれを見てくれ。よくな」

「あれは」

「あそこに」

ここで二人は気付いたのだった。そこに何がいるんのか。

夜の街の光が時折消えていく。そしてまたすぐに出て来る。まるで何かが通り過ぎたかのように。そう、明らかにそこを通り過ぎていたのである。

「あそこにいますね」

「わかったな」

「ええ、よく」

本郷は役に対して頷いたのだった。

「見えますよ。あそこにいますね」

「わかったな。それではだ」

「はい、仕掛けます」

ここから出される答えはもう決まっていた。

「あの魔物に」

「それではだ。行くぞ」

役はもうその手に札を出していた。あの茶色の札をだ。

すぐに塔の外に向かって投げる。それと共に二人はその塔の外に飛び出た。背中にその札が変わった翼が付く。そうしてそれを羽ばたかせ飛ぶのだった。

飛びながらその光を消す何かに襲い掛かる。まずは本郷が動いた。

「じゃあやりますね」

「頼む」

「確かに夜の中じゃ見えないけれどな」

本郷は右手にあの小刀を数本出しながら言っていた。

「ここからじゃわかるぜ。よくな！」

その光を消すものに対して小刀を投げた。それは見事に突き刺さったのか鈍い音を立てる。本郷はその音を聞いてにやりと笑った。

「まずは一撃ですね」

「そうだな。しかしだ」

役は飛びながら本郷に対して告げてきた。

「これでわかったな」

「はい、俺達のことだ」

無論それをわかったの攻撃であった。

「はつきりとわかりましたね。これで」

「さて、来るぞ」

魔物が来るのが見えていた。本郷の目には。

下からそのまま急降下して来る。気配はないが。彼はそれを見て隣を飛ぶ役に対して告げたのだった。

「来ましたよ」

「下からか」

「そうです。どうされますか？」

「かわす」

返答は一言だった。

「ここはな」

「守らないんですか」

「これも考えのうちだ」

彼は言うのだった。

「だからだ。任せてくれ」

「ですか」

役の今の言葉は信じた。既に先程塔の上から魔物の姿を見出していたからだ。昼の疑念はこれで奇麗に消えてしまっていた。

第十七章

「それじゃあここは」

「かわしはする」

役の言葉に限定がかかってきた。

「しかしだ」

「しかし？」

「ただかわしはしない」

こうも言うのだった。

「ただな」

「何か考えがあるんですね」

「あらゆる局面を考えて手を打つ」

役の言葉は普段の冷静なそれであった。

「それだ。だから今は」

「むっ!？」

懷から白い札を出した。それを手から離すをすぐに場所を変える。本郷もだった。そのまま下から突き上げてくる魔物に対してその白い札が光った。すると。

札は無数の白い羽根に変わった。そのうえで魔物に対してまとわりついたのだ。その漆黒の姿にだ。

「見えますね」

本郷はその白い羽根が付いた魔物の姿を見て述べた。

「あいつの姿が。実によく」

「昼に言った通りだ」

役は本郷の横に翼で来ながら答えた。

「黒には白だ」

「ここでやるって意味だったんですか」

「塔の上から見たのもそうだったが」

それもだとは言う。

「しかしだ。こちらが本番だった」

「そういうことだったんですか」

「そういうことだ。しかし上手くいったな」

役は会心の声で述べた。

「魔物の姿が夜の闇の中でもはっきりとわかる」

「ええ。羽根がついて俺の目にも余計に」

見えると言ったのだった。

「見えますよ。役さんにもですよね」

「そうだ。もうその姿形までもな」

「それじゃあ。決められますね」

「うむ」

本郷の言葉に応えながらその手にまた札を出してきた。今度は黒い札であった。

数枚持っているその札を魔物に対して投げた。すると札はそれぞれ漆黒の梟となり魔物に襲い掛かる。そして本郷も梟に木を取られそれに応戦している魔物に突っ込み切りつけたのだった。

今度は見事に決まった。魔物は袈裟懸けに斬られた。闇の中に見えることそなかったがその黒い鮮血が飛び散ったのだった。

「役さん！」

本郷は切りつけたうえで役に声をかけた。

「今ですよ！」

「よし」

役は本郷の言葉に応えまた札を出した。今度はまたあの赤い札だった。

それを左から右に横薙ぎに出すとすぐに火の玉になり魔物に襲い掛かる。それが数個あった。その数個の火の玉は今度は一直線に魔物に向かった。最早その姿がはっきりと見えていたからだ。

火の玉は全て魔物を直撃した。紅蓮の中にその顔のない漆黒の姿が浮かぶ。しかしそれは一瞬のことではなかった。まさに一瞬だった。

その一瞬の後で姿を紅蓮の中に消していく。こうして魔物はこの世から消え闘いもまた終わったのだった。

闘いを終えた本郷は役の隣に飛び戻っていた。そうして闇の中に消えていくその紅蓮の炎を見つつ彼に対して言葉をかけたのだった。

「終わってみれば呆気なかったですね」

「そうだな」

役は本郷のその言葉に対して静かに頷いた。

「終わってみればな」

「ええ。まるで何でもなかったかみたいに」

終わったからこそその言葉だった。

「呆気ないものですよ」

「それはわかったからだ」

「わかったからですか」

「コロブスの卵だ」

ここで諺が出て来た。

「わかってしまえばどうということはない」

「そうですか」

「例え異世界の相手でもだ。やり方さえわかればだ」

「楽に倒せるってわけですね」

「その通りだ。こうしてな」

こう本郷に話すのだった。

「楽に終わらせることができるのだ」

「成程」

「しかしわからなければだ」

言葉がまた付け加えられた。

「苦労することになる」

「少なくとも俺一人じゃ難しかったですよ」

「勝つのはな」

「ええ。勝てませんでした」

このことは今でもはっきり認識しているのだった。本郷も。

第十八章

「とてもね」

「だが。わかったからこそ勝てた」

役はここでまた言った。

「このようにな」

「そうですね。じゃあ役さん」

「ああ」

「そのあいつですけれど」

もう完全に消えてしまった魔物のことをまた言うのだった。

「俺達がいるこの世界とは全く別の世界の奴ですよ」

「それは昨日言った通りだ」

それ以上は言う必要も無いといった言葉だった。

「それはな」

「そうですか。魔界でもなく」 8

「魔界か」

役は魔界と聞くと言葉を少し変えてきたのだった。微妙に、ではあるが。

「魔界の方が遥かにましだな」

「ましですか」

「実は魔界はあの者達と対立している」

そしてこのことも本郷に話してきた。

「彼等とな」

「それはまたどうして」

「魔界には秩序がある」

役は魔界にいる悪魔達についてから話をはじめた。

「悪魔達のな。そうだな」

「はい」

そしてこれは本郷もよくわかっていることだった。悪魔達は悪と

はあるがそこには秩序がある。厳格な法があるのだ。言い換えれば彼等もまた正義の一つなのだ。秩序や法が正義であるというならば、実際に彼等が神を倒せば彼等がその神になると言う者もいる。

「しかしだ。あの者達は違う」

「秩序とか法とかはないんですね」

「全くだ。あるのは混沌だ」

それだというのだ。

「それだけだ。あとは本能か」

「そういえば原始的だって言っていましたね」

本郷は役の昨日の言葉をここでまた思い出した。

「あの連中は」

「その通りだ。その本能のまま魔界の悪魔達も襲っている
そうしているというのだ。」

「そして秩序や法を重んじる悪魔達はだ」

「奴等を全力で倒そうとしているんですね」

「考えてみればいい。我々は悪魔と対している時は話し合いで済む
ことが多いな」

「ええ」

実はそれが現実なのだった。

「むしろ天界の奴等より話がわかる位ですよ」

「他にも獣人や怨霊とも言葉を交えたことがあったが」

「あの連中とは全く、ですか」

「話し合いなど全くできはしない」

役はまた言った。

「戦い。殺し合うだけだ」

「面倒な奴等ですね」

「そうした相手だ。だからこそ厄介な相手だ」

「そうですね。そうした相手だと」

「また。戦うことになるかも知れない」

役の目が陰しいものになった。

「あの世界の住人とな」

「まあそれが仕事なら仕方ないですね」

本郷は役の言葉を聞いて右手の小指で耳の中をほじりながら述べた。

「話し合いができないのなら潰すだけですし」

「その通りだ。あの世界の住人は倒すしかない」

役の今の言葉は本郷と同じものだった。

「必ずな。倒すしかない」

「そうですね。今みたいに」

「わかったな。それではだ」

戦いは終わった。次に言うのはこのことだった。そしてまた言うのだった。

「帰るか」

「ええ、そうですね」

本郷は役の今の言葉に頷いた。

「警視正さんも待っていますし」

「そういうことだ。では本郷君」

「はい」

「戻ろう」

役の言葉は穏やかなものになっていた。戦いが終わったことを何よりも証明するものだった。

「それではな」

「はい、それでは」

「帰るのは明後日だが」

次にはこんなことも言う役だった。

「明日はどうするかだな」

「そんなの決まってるじゃないですか」

役の今の言葉に対する本郷の返事は実に明快なものだった。最早それ以外には有り得ないといった、まさにそうした返事であった。

第十九章

「飲むんですよ」

「飲むのか」

「それ以外に何があるっていうんです？」

そして満面の笑顔でこう言うのだった。

「仕事が終わったんですから」

「そうだな。しかしだ」

「しかし？」

「飲んでいたのは今日もだったな」

役はここで昼の自分達のことを思い出したのだった。

「飲んでいたのは」

「まあそうですね」

本郷もそれは否定しなかった。

「俺も舟で飲んでいましたし」

「いいものだった」

役はその昼の酒を思い出してまた述べた。

「舟の上で飲むのみな」

「それで明日もですか？」

本郷は先程と同じ明快な声でまた役に問うた。

「舟の上で」

「いや」

しかし役は今の本郷の言葉には首を捻りそれから彼に言葉を返した。

「昨日の今日ではな。どうもな」

「そうですね。じゃあまた別の場所で」

「とにかく仕事は終わった」

このことは間違いなかった。夜の魔物は確かに死んだ。

「それではだ。明日はな」

「はい、飲みましょう」

「警視正さんにも勧めてみよう」

役は彼にも気を向けていた。

「どうせならな。二人よりはな」

「三人で、ですよね」

「そういうことだ。それではだ」

「はい、警視正さんにもお声をかけて」

本郷の声はまた明るかった。

「それで楽しくやりますか」

「そうだな。それではまずはな」

「はい、戻って」

何はともあれまずはそれからだった。

「今は寝ますか」

「そうしよう」

しかし今は何よりも休息だった。戦いが終わって明日の宴よりまずはそれだった。こうして彼等は戦場から去り塔に戻った。そしてその次の日だった。

「ここですか」

「はい、ここがいいですよ」

警視正は満面の笑顔で本郷に告げていた。

「ここがね」

「そうですね」

本郷も彼の言葉に頷く。二人と役は今運河のほとりでテーブルを囲んでいた。そしてそのうえでワインにソーセージ、それにチーズといったものを楽しんでいるのだった。

「こうして運河を静かに見ながら飲むっていうのもね」

「いいものでしょう」

「舟に乗りながらもいいものですが」

役は右手にその紅いワインが注ぎ込まれたグラスを持ちつつ述べた。

「ここで飲むのもまたいいものですね」

「はい。ですから今日はここだと提案させてもらったのです」
また言う警視正だった。

「どうですか？ 本当にいいものでしょう」

「はい」

「とても」

二人の返答は決まっていた。もう既に。

「こうして静かに水を見ながららっているのもいいですね」

「舟を楽しむのもいいですが」

「オランダが運河の国です」

警視正はまた言うのだった。

「その運河の美しさもまた誇りですので」

「だからですか。それを見ながらというのも」

「いいものだということです」

「そういうことです。それでです」

彼はさらに二人に言ってきた。

第二十章

「このワインですが」

「ワインですか」

「今我々が飲んでいる」

「そう、そのワインです」

話は最後にワインに及ぶのだった。

「飲みやすいでしょうか」

「ええ、とても」

「これはかなり」

二人はそのワインをここでも飲みながら警視正の今の言葉に頷くのだった。

「それにしても何処かで飲んだような」

「懐かしいような味ですね」

「それは当然です」

そして警視正は穏やかに笑って彼に述べるのだった。

「何故ならです。そのワインは」

「このワインは？」

「そしてチーズもソーセージも」

「むっ」

本郷はそこにまで話が及んで顔色を少し変えたのだった。

「それにまでですか」

「実は。我が国のものではありません」

これは本郷にとっても役にとっても意外な言葉だった。役もそのグラスの中のワインを見詰めて何かを考えるような顔になるのだった。

「このワインはですか」

「そしてフランスやドイツのものでもありません」

この辺り両国に何かと迷惑を蒙ってきたこの国の歴史が見られた。

ナポレオンに攻められヒトラーに攻められだったからだ。そもそも独立前にはスペインの下にあった。オランダの歴史もかなり複雑なのである。この辺りは西欧の経済の先進地域でもあり続いていたからだ。

「欧州のどの国のものでもありません」

「ではどの国のものですか？」

「お国のものです」

そしてこう二人に言ってきたのだった。

「そちらのお国の」

「日本のですか」

役はここでわかったのだった。本郷もだ。

「それがこのワインですか」

「そういえばそうですね」

本郷はここでまた一口含んで確かめてから述べた。

「この味は。確かに」

「甲州ワインですね」

「はい、そうです」

日本のどの国のワインかまで見抜いた役の言葉にすぐに頷いてきたのだった。

「その甲州ワインです。そしてチーズにしろソーセージにしろです」

「日本のものですか」

「何しろ。日本に留学していましたので」

ここでまたにこりと微笑む警視正だった。そのうえでまた述べるのだった。

「その味にも親しみがありません」

「そうでしたか」

「それでこのワインをでしうか」

「それが一つの理由です。それにこれはおもてなしでもありません」

「おもてなしでもですか」

「といいますと」

また警視正に対して問う二人だった。話しているうちにワインは一本完全にあけていて二本めに入っていた。相変わらず見事な飲み方である。

「どういったものですか？」

「おもてなしの意味とは」

「オランダにあっても日本はある」

日本好きの警視正らしい言葉であった。

「それを最後にお知りになって頂きたかったのです」

「そうですか。オランダにも日本はあるんですね」

「こうしたふうに」

「その通りです。それでは今度はです」

「はい」

「私が日本にお伺いしたいと思っていますので」

にこやかに笑ってまた二人に話した。

「その時はまた。御願います」

「ええ、その時は是非」

「日本を楽しみましょう」

その日本のワインをオランダにおいて楽しみながら言葉を交えさせる三人だった。仕事は終わり日本に帰る前のほんの一時の楽しみの時だった。闘いを終えた彼等にとってこの時はかけがえのないものであった。それだけにその中での日本のワインは美味しいものであった。

夜の影 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8764h/>

夜の影

2010年10月8日15時20分発行